京都大学地理学談話会

# 会　報

第１０号

１９９９

［目次］

寄稿〔佐々木高明先生〕 ..... 1

講演会の報告〔井関弘太郎先生・久武哲也先生・藤田裕嗣先生〕 ..... 5

研究室便り ..... 9

＜成田孝三先生の御退官について＞ ..... 9
＜博士の学位について＞ ..... 9
＜研究室の動静＞ ..... 10
〈３回生〉 ..... 10
〈学部卒業生・院生の進路〉 ..... 11
〈院生の研究状況の報告〉 ..... 12
〈1999 年度講義題目〉 ..... 13

事務局から ..... 14

＜地理学談話会 1998 年度会計報告＞ ..... 14
＜受贈＞ ..... 14
＜訃報＞ ..... 15
＜お知らせ＞ ..... 15
＜1999 年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞ ..... 16

# 寄稿

## 大学院生のころ
## —博士課程第一号の回想—

佐々木高明
（昭和30年修士課程修了，
昭和34年博士課程退学）

**新制大学院の一期生**　ここでいう新制の大学院というのは、現在の大学院のことである。それをなぜ「新制」というのか。それは戦後、旧来（戦前から）の六・五・三・三制に代り、現行の六・三・三・四の新しい学校制度がつくられ、四年制の学部の上に修士課程二年、博士課程三年の大学院の制度が初めてつくられたからである。旧来の大学院には修業年限の規程がなく、博士課程もなかった。学位もライフワーク的な論文の提出によるものだけだった。この古い大学院に代って設置された新しい大学院の制度は、私立大学では昭和二七年から、国立大学では同二八年に発足した。私はその昭和二八年に新制大学院の最初の学生として文学研究科修士課程地理学専攻に入学したわけである。

同期生は船越（旧姓押野）昭生君。今は少し健康を害しているようだが、当時は元気な薩摩健児であった。一年上級には旧制の大学院最後の特別研究生であった矢守一彦さんがおられた。大へんな文才の持主で、その道へ進めば芥川賞を確実にとれたのに惜しいことをしたというのが周りの評価だった。残念ながら平成四年に他界してしまわれた。その一年上が末尾至行さん。昭和二九年十月に助手に就任され、三五年に転出されるまで、終始、当時の地理学教室の若者頭をして下さった。地理学教室があったのは、古い陳列館の建物の二階の北西の隅、その北と西の窓際に沿って机を並べ、毎日そこへ通ったものである。その頃の雰囲気はこの『会報』の第八号に末尾さんが書いて下さっているので、ここでは繰り返さない。

翌年には藤森勉・島田正彦の両君が修士課程に入学。修士課程が完成したが、制度的にはまだまだ不安定だった。今から思うと、当時の先生方も新制大学院のことはよく分かっておられなかったのではなかろうか。例えば、肝心の修士論文についても、何時までに、どのような形（例えば論文枚数など）で提出すればよいのかがなかなか決まらない。それがやっと決まったのは論文作成中の昭和二九年の秋頃だったと思う。一事が万事、この調子だったから第一期生は大へんだった。船越君は慎重だったから、修士論文の提出を一年延期し、結局、修士課程を了えて博士課程の第一号になったのは私だけになってしまった。その後、博士課程について言えば、船越君の次に山澄元君、高橋正君とつづくことになる。

だが、その頃、本当に大変だったのは、

学生の方ではなく、むしろ当時の先生方ではなかったかと思う。戦後の教室の再建、人文地理学会の創設などに織田先生をはじめ、当時の先生方が御苦労されたことは『会報』第八号に詳しいが、今と違って新制大学院発足の頃は、文学部の教授スタッフは織田先生お一人で、教養部から藤岡・西村両先生、人文科学研究所から森・日比野両先生が出講して講義や演習を兼担して下さっていた。だが、学部から大学院までの講義や論文指導を、一人で引受けておられた織田先生は本当に大変だったと思う。

**講義の思い出のいくつか**　当時、織田先生は、後に『古代地理学史の研究』（昭和三四年）に収録される諸論考の素稿に当たるものを講義しておられた。また藤岡先生はやはり後に『都市と交通路の歴史地理学的研究』（昭和三五年）にまとめられた論考などを講義して下さっていた。学位論文をおまとめになる前後の、研究者としてもっとも脂に乗り切った時期の講義を聞かせて頂けたのは本当に幸いであった。「昔、トゥーレに王ありき」というゲーテの言葉に始る「ピュテアスとトゥーレ」や、アレクサンドロス大王の遠征につづく「ネアルコスのインド洋航海記」などの論文は、いま読み返しても本当になつかしいし、また大へんな力作だと思う。

お二人の先生のほか、人文研の森鹿三先生の講義も思い出深い。とにかく先生はお話がお好きなうえ非常な博識で話題も極めて豊富。教室にお見えになると、まず、私や船越君などでお相手して楽しい時間を過す。時に講義の時間の半分以上を「楽しくて為になる」雑談で過したこともある。講義は王庸の『中国地理学史』や『新中国地理』などの中国文テキストを使ってのものが多かったが、中国文を漢文風に読むのではなく、現代日本語に翻訳して読むことの必要性を教えて頂いたのも森先生であった。

こうした地理学プローパーの先生方とともに、私にとり非常に印象深かったのは考古学の梅原末治先生の講義であった。その頃、考古学の大学院生がまだいなかったので、昭和二九年の梅原先生の大学院の講義を聴講したのは船越君と私の二人だけだった。開講の日、いささか緊張した二人はノートを展げて先生の講義をメモしようとしてまず叱られた。「私が今話そうとしていることは全て私の著書の中に書いてある。君たちはメモなどせず、私の話をよく聞いて学問の方法を学び給え」。誠にごもっともな仰せで「はい」とノートを伏せたが、目と目が合うと「どうかね」といろいろ質問される。うまく答えられないと「駄目だね」と叱られる。大変な講義で一年間どうなるかと思ったが、六月になると急にフランスへ出張されることになり、「君たちにはすまんことをした」とおっしゃって、その年の授業は終わってしまった。船越君

とやれやれと胸をなでおろしたことは言迄もない。

翌年は梅原先生御退官（当時は満六三才の誕生日で退官）の前年に当り通年の最終講義が行われた。「殷代の古銅器」という題で、先生のライフワークのまとめの講義というべきものであった。講義は朝の八時から始る。有光助教授、樋口講師、横山助手、それに先輩に当る数人の他大学の教授の方々がそれぞれノートを手に教室で待つ。先生は朝七時半頃には教室に来られ、図・写真などの準備が整うとコツコツと二階の教室へ上って来られ、時刻にかかわりなく講義が始る。一旦開講されると、教室は閉じられ遅刻者の入室は一切禁止。教室には常にある種の緊張感がみなぎっていた。

そこで先生は「私は殷墟の発掘に実際に立会った上、台湾に持ち出された遺物、欧米の博物館に流出した遺物の全てを見た。殷代の遺物の全てに通じているのは私のみである。したがって、私の意見が全て正しい」という強い信念をお持ちで、その講義は自信に満ちたもので、迫力充分の講義であった。迫力があり過ぎて講義の最中に質問が横山助手や樋口講師にまで及んで、ハラハラさせられたことも少なくなかった。とにかく、これほど迫力のある講義を受けたことは、その前にも後にもない。「梅原先生の最終講義を受けられたのですか……。」と佐原眞さん（現歴史民俗博物館長）が、ある時思いを込めて話しかけられたのも、わかるような気がする。

**共同調査のことなど**　講義や演習などとともに、思い出に残るのが文学部や教養部の地理学教室を中心にいくつかの共同調査が行われたことである。私の入学前に湖東平野の共同調査があり、昭和二八・二九年度には、藤岡先生を代表者とする教養部の教室を中心とする「都市域における山村変遷に関する地理学的研究」と文学部の国史教室と共同で行われた織田先生を中心とする「若狭湾沿岸の漁業の地理的研究」の二つが並行して行われた（その成果は人文地理学会編『地域調査』（昭和三〇年）に収められている）。私は主に若狭調査の方に参加させて頂いたが、織田先生をはじめ、末尾・矢守・船越・島田・藤森氏らとともに、昭和三〇年まで毎夏、暑い盛りに若狭の漁村地帯を歩き廻った。今、思い出しても調査には余り役立たなかったようだが、毎晩、皆で食べる夕食が楽しみで「〇〇の旅館の女中さんは可愛いい娘だなあ。△△君が（を）好きなんと違うか」といった他愛のない話しで、いつも盛り上っていたように思う。教室の共同調査は、結果として織田先生を中心とする親睦旅行の機能を果していたようである。

昭和二九・三〇年度には藤岡先生を中心とする「櫛田川・紀ノ川流域の歴史地理学的研究」という共同調査が実施された。この調査はきわめて規模の大きなも

ので、京大の教養部、文学部の地理学関係のフルメンバーをはじめ、京大、立命館大学その他近畿の多くの大学の地理や歴史のメンバーを加えたもので、その報告書『河谷の歴史地理—櫛田川・紀ノ川流域—』（昭和三三年）の執筆者は三四名に及んでいる。共同調査といっても、これだけの多人数なので、それぞれ専門の課題に従い、フィールド・ワークを行った。私は吉野川・櫛田川の分水界の吉野川斜面に立地する林業村高見村の杉谷部落を選び、その実態調査を行った。このとき同行して頂いたのが山澄元君であった。調査の方法をめぐって役場で議論したことが懐しい思い出として残っている。同君は昭和三六年に末尾さんの後を継いで助手となったが、その後、昭和五一年に四四才で夭逝された。我われの世代の中では最も優秀な学徒を最も早く失ったような気がしてならない。

その後、昭和三四年から三七年にかけて大阪府の門真市をフィールドに「大都市近郊の変貌」の調査が行われた。私は昭和三四年四月には教養部の助手に採用されていたが、水津一朗助教授（当時）はじめ、船越・山澄両君と成田孝三・坂本英夫・小林健太郎君などとともに調査に参加した。当時、この門真地域の変貌は急激に進行していて、蓮池のあるのどかな農村景観の場所が、一年もしない間に工場や住宅地帯に急変するような例が少なくなかった。この調査には、その頃学部や大学院に在学していた多くの方々に参加して頂き、その成果は『大都市近郊の変貌』（京都大学文学部地理学教室研究報告第一輯）として昭和四〇年に刊行されたことは御存知の通りである。

このような地域調査で共同作業を行うほか、私が大学院に在学していた頃は、毎晩のように一緒に飯を食いに出かけたり、映画を見に行ったり、野球をしてみたり、ずい分仲良くやっていたものである。中でも楽しく思い出されるのが、昭和三〇年の夏だったと思うが、皆で比良山に登ったことである。当時修士課程にいた島田正彦君——彼も平成九年秋に鬼籍に入ってしまわれた——が京大山岳部出身であったことから「皆で比良山へ行う」ということになり、浮田夫妻・末尾助手をはじめ、当時、在籍していた学生や院生、それに事務の女性や島田君が下宿していたH家のお嬢さん、島田君の山岳部の友人など十人余りで、大挙して登山し、飯盒炊爨などをして楽んだのである。この登山では二つの恋が芽生え、後に二つのカップルが誕生することになるが、紙数も尽きたので、その先の話は別の機会にゆずることにしよう。いずれにしても、私が大学院生として在籍した頃の地理学教室は、厳しい中にもまことに家庭的な雰囲気で楽しいものだったことは確かである。

# 講演会の報告

1998年10月31日，文学部において，談話会秋期講演会として、名古屋大学名誉教授・井関弘太郎先生と甲南大学教授・久武哲也先生、神戸大学助教授・藤田裕嗣先生に講演していただきました。

## 東西日本の間（あいだ）地帯

井関弘太郎（昭和23年卒）

私は50年前に「近畿への米穀供給圏」（『日本史研究』7号）という論文において、チューネンの孤立国を、京都を中心とする古代日本に適用し、東日本を舞台に地図化して論じた。チューネンのいう自由式農業地帯は園地（山城国）に、林業地帯は真木伐採地（田上・金勝・信楽山地）に対応する。輪栽式・穀倉式・三圃式農業地帯は、日本では水田稲作地帯（近江・北陸）に該当すると考えられる。これらの範囲は、基本的に関ヶ原を越えない。

一方、関ヶ原以遠の美濃や尾張では軽物としての絹を貢納した。このような貢絹神社のある国つまり貢絹地帯は、伊勢・尾張・美濃・越前・信濃・遠江の6ヶ国である。さらにその外側は、御牧のある国つまり馬を育てそれを貢いだ地帯で、信濃・甲斐・上野・武蔵の4ヶ国であり、チューネンのいう一番外側の牧畜地帯にあたる。ちょうどチューネンのいう半径40マイル、つまり京都から60km地点の近江・美濃国境の三国山を越えると、食物貢租地帯が貢絹地帯になり、さらに牧畜地帯に移行する。このさらに外側には、万葉集の防人歌の詠人送出国である関東がある。つまり古代国家では、このような理にかなった土地利用秩序が存在したと考えられる。

関東には、北方系つまり縄文系の先住者が多く住んでいた。したがってそこの統治は大変で、そこに強い権力を与えたのが826年の親王を国守とした令であった。このように関東の特殊な権力は、結果として武家政権である鎌倉幕府の成立を導く。この鎌倉幕府の最初の大々的な権力発令は1186年の「関東御分国」である。この境界が東の武家勢力と西の公家勢力の境界地帯であり、私はこれを日本の「間（あいだ）」地帯と呼ぶ。

この問題は自然的な現象にも突き当たる。伊勢湾を境にして、西側は正統の遠賀川式土器、東側は水神平式土器の地帯で、縄文海進による奥伊勢湾、後の輪中地帯が両者の接点である。東側である中部以北は縄文文化の地で、ここは人面・土偶装飾付深鉢型土器の分布圏と一致する。西側は朝鮮半島から渡ってきた弥生文化の地であり、その先端が伊勢湾と濃尾平野の低湿地の西側である。この境界が、古代の貢納地帯や鎌倉時代の政権の境界と一致する。この境界は、さらに現代の言語的境界にも現れる。木曽三川の中で河床高が最も低い（本流を意味す

る）揖斐川を境にして、西側は近畿アクセント、東側は東方アクセントであり、語彙も異なっている。

以上の問題は、日本の文化を考える上で極めて重要である。日本の人口分布比率は、縄文前期には東日本が 82.8%を占めていたが、弥生前期になると西日本の比率が 50.8%と急速に増大する。このような文化圏の動きが、現在までの民俗や言語の境界と密接な関係をもつことになる。

しかし、この東西日本の「間」地帯である名古屋圏は、江戸や京・大坂といった東西の強力な文化の狭間で、感性が捉える精神的価値の高揚が貧しい所であった。近現代の繊維産業を例に挙げると、意匠に欠ける白木綿の大産地であったが、しかし皮肉なことに、この量産化可能な白木綿と豊田自動織機との結合が工業出荷額日本一の愛知県を作り上げた。しかし、名古屋圏が劣っているのは、物量では説明できない地域の文化的蓄積の希薄さではなかろうか。だが、最近の動きを見ると、例えば名古屋大学出版会の経営体験からみても、この 4 半世紀の進歩は決して無視できないものを感じるようになった。このような緩やかではあるが、現代の文化を昂めようとする努力がみられる名古屋圏を、これからは「間（あいだ）」地帯ではなく「中間地帯」と呼ぶようにしたい。「中」の字義は重いからである。

## 北米先住民地図研究の最近の動向

久武哲也（昭和 45 年卒）

本日は、①最近の地理学研究における先住民地図の扱い方やその占める位置、②文化人類学・生態学における先住民地図化プロジェクトと文化的生存の問題との関係に関する研究動向、について述べたい。

現在の人文・社会科学における大きなうねりの一つの焦点は、多文化主義と文化の共生であろう。そこで重要な要素となっているのは、個々の文化の自己表現つまりどのように自画像を描いていくかという「表象」の問題である。「先住民」という概念は本来、植民地主義の中で形成されてきた概念であり、政治的・歴史的な意味を多く含んだ言葉である。これを地理思想史的な文脈の中で考えるとすれば、「脱植民地化」という今日の大きな流れの中で、先住民の存在を文化的・政治的・学問的に明確化していくことが必要である。

まず、多数派のもつ価値への同化に抗して自らの価値を主張し、その文化の表現法や教育制度を批判しながら相対化する動きに注目する必要があろう。ヨーロッパの植民地化の過程で描かれた地図の批判的な分析もその一つである。逆にアジアや太平洋その他の地域の先住民が自らの表現手段を用いて、自己の土地を記

述する方法や、地図化を積極的に意義づけていく立場もある。この後者の最近の流れは一般に「文化地図学」と呼ばれている。

そして先住民自身による地図作成は、脱植民地化の一つのキーワードとなっている。クラッシュ(J.Crush)によれば脱植民地化には次の4つの検討課題があるという。①植民地化の中で地理学の担った役割、②宗主国が植民地を見る視線とその表象様式、③宗主国の文化への同化手段としての地理学的方法論の整備、④先住民概念創出の過程や同化過程の中で消し去られた文化に対する先住民自身による意味づけの回復、である。文化地図学は、このうち、とくに④の立場と直接連動している。

こうした流れの中で、1987 年には研究グループとして「北米先住民研究」が結成された。そして 1991 年にはアメリカ地理学会において「Culture and Maps」Project が始まり、93 年にはその成果として論文集が刊行された。このプロジェクトには主に次の3つの立場が含まれている。①地図学史的立場からの、西欧の地図化に対する先住民の地理的情報の貢献度の解明、②先住民の居住地の地図化を通しての先住民の資源評価とその利用に関する権利回復の追求、③先住民が自らのテリトリーを守る政治闘争の重要な手段としての居住地の地図化、である。

地図学史的流れの中でみれば、96 年には「北米先住民地図展」がアメリカ全国を巡回し、先住民の地図に対する関心が高まると同時に、こうした先住民の地図を集大成する動きが活発化した。このような歴史の再審に係わる歴史的資料としての先住民地図の発掘が①の立場である。これに対して②や③は、より現実的に環境保全や文化的生存に関わる新しい動きである。

こうした②と③の立場の研究は、「文化的生存グループ」と共同し、「先住民地図化プロジェクト」を世界 60 ヶ国で開始している。そこでは、GIS や衛星写真（リモートセンシング）を駆使して先住民の地理的情報が地図化され、自然保護や土地利用計画等に生かされている。

その過程で問題となってきたのは、地名の表示である。つまり、先住民文化と現代技術としての GIS の双方を理解できる翻訳者としての先住民技術者の立場の重要性と関連して、地名の並記システムの確立が目指されるようになったことである。異なった文化の認知システムやその表現方法としての地図同士にも何らかの変換可能な接点があるはずである。このような「わかりあえる地図」の範囲をどのレベルで決定するかということは、地名の表示だけに係わる問題ではなく、より広い一般的な解釈の枠組を必要とする。地図の翻訳に関わる異文化間の差異には、①空間システム、②空間コンセプト、③記号システム、④コスモロジー、

の４つのレベルがある。

このような各レベルの実例をいくつか挙げておくが、翻訳者というのはこの各レベルにおける両者の文化の差異を理解することが必要となってくる。とりわけ異なった文化の中における「聖なる場所」の理解はなかなか困難だが、しかし、これこそが土地に対する民族のアイデンティティーを支え、それゆえに文化的生存にとって最も重要な要素となっているのである。GIS という技法とともに、先住民のコスモロジーという思想の探究と結びつくことで、現在の先住民地図研究は従来とは異なった次元に進みつつある。

## 兵庫周辺の船による 15 世紀中葉の海上輸送－摂津国の船との対比－

**藤田裕嗣（昭和 55 年卒）**

報告者は近年『兵庫北関入船納帳』を史料に様々な分析を試みている。以前、阿波国を対象とした分析を行った際、兵庫により近い港と遠い港との間の比較検討を今後の課題とした。今回はこれを受け、阿波国よりも兵庫に近い摂津・播磨・淡路の船をとりあげ、その役割分担や地域分化を検討・指摘したい。特に、兵庫よりも京都に近い船籍地の船が一旦西に赴いて、京都方面に戻る途中で兵庫の関所を通過した事例に注目し、対比的に捉えたい。

史料とする『兵庫北関入船納帳』はすでに刊本化されているが、その記載内容は、①入船月日、②船籍地、③物品名、④その数量、⑤関料とその納入月日、⑥船頭名、⑦問丸名、の７項目が基本で、船舶約 1950 艘分、物品約 2600 件分のデータが収録されている。このうち地理学的には②の船籍地の記載が特に重要である。この中の「三原」の記載については、備後の三原と言われてきた通説に対し淡路の三原説を提示した今谷明氏に従う。淡路三原から塩を積んで史料に登録された船の記載は多いが、これらは京都方面から何らかの物品を運び、その帰りに塩を積んで兵庫に通関したと推測される。淡路三原の塩は播磨以東の船が、備後三原等で産された塩（「備後」と登録されている）は主に牛窓以西の中国地方に所属する船がそれぞれ運び、地域的な役割分担がされていたことがわかる。

一方、米を運んだ船の所属地は多数に上り、米はその生産地が分散していたことを反映しているとみなされる典型的な物品である。

次に、兵庫以東の船のみが運搬した物品について全体量に占める分担率をみると、専ら「地下」（兵庫）の船が運搬した物品は多種多彩である。本研究でフィールドとした摂津・播磨・淡路の各港に所属した船の運搬した物品の累計分担率を検討した。とりわけ兵庫の船が運搬した分担率は、播磨・淡路の船が主に運んでいることから主産地を両国と推測でき

る物品は概して低く、逆に全体として阿波などの船も運ぶ物品では約 90%にも達するものがあることが明らかとなった。また、遠国の船が主に運搬した物品についてみると、兵庫の船が全く分担しないものもある一方で、今回のフィールド内では兵庫のみが運んでいるものとに二極化していた。

さらに、兵庫以東に所属する船が運搬した物品を船頭別・物品の分類別に検討した。その結果、播磨・淡路の物品のみあるいはそれを中心に運ぶ船頭が多く見られたが、阿波国や遠国のみあるいはこの両者ないし播磨・淡路も加えた三者を組み合わせたものも約半数を占めたことがわかった。

以上の考察から、摂津・播磨・淡路船籍の船においては、物品運搬において品目の役割分担がみられ、さらに船籍地および物品の産地において地域分化が生じていたことが明らかとなった。

## 研究室便り

### ＜成田孝三先生の御退官について＞

91 年 4 月の教授御着任以来、当教室において助手時代も含め 11 年間にわたり教育・研究に御尽力いただきました成田孝三先生が、本年 3 月 31 日をもって、この度めでたく京都大学を御退官されました。

御退官記念祝賀会は 4 月 4 日、京都ロイヤルホテルにて 90 名以上の方々の御出席により盛大に行われ、記念出版として、成田孝三編『大都市圏研究（上）・（下）』が、先生以下 33 名の談話会会員の寄稿へのご賛同を得て大明堂より発行されました。先生は本年 4 月 1 日付けで京都大学より名誉教授の称号を受けられました。

御退官後は、大阪商業大学大学院地域政策学研究科教授ならびに、大阪府立産業開発研究所非常勤所長として、引き続き教育・研究に御活躍されております。

### ＜博士の学位について＞

石　原　　潤

大学院重点化に伴いまして、文学研究科では、課程博士を積極的に認定していこうと言うことになり、地理学教室でも、課程博士の取得が順調に進んでいます。平成８年３月には滝波章弘氏が、平成 10 年３月には米家泰作氏が、また平成 11 年３月には佐藤廉也・堀健彦氏が、それぞれ取得されました。地理学教室では、課程博士論文の要件としては、全体が統一されたテーマに基づく独創性の高い内容を持ち、序章・結論を除きおおよそ５章程度で構成されており、各章が学会誌に掲載されたかまたは投稿予定の論文に相当すること、としています。かなり高いハードルですが、前記の４氏は、これ

をクリアしてくれました。後続の諸君の健闘を祈ります。

なお、主に博士課程中退者向けの対策として、博士課程特別研修コースが作られています。これは、在職のまま、１年間このコースに属して、博士論文の作成を目指すもので、前記の佐藤氏は、京都大学総合博物館助手に在籍しつつ、この制度を利用して学位を取得されました。今後とも、希望者はこのコースを利用されることが可能です。

一方、論文博士についてですが、同じく平成８年度以降の過去４年間に、論文博士を取得されたのは、野沢秀樹・田中和子の両氏のみです。他大学の出身者に比べ、京大地理の出身者の学位取得率は、６０代以上の方はある程度高いように思いますが、５０代以下は相当低いように思われます。大学改革が進み、大学院の比重が高まり、他方では大学に対する外部評価が云々される昨今、学位の取得を希望されている方も少なくないのではないかと推察いたします。論文博士についても、ふさわしい論文であれば、積極的に学位を出して行きたいというのが、現在の教室の考えですので、ご考慮いただければ幸いです。

この場合の博士論文は、量的には個別論文１０編以上程度、書物なら３００頁程度で構成されているのが望ましいでしょう。１巻の学術書として出版されたものでも結構ですし、その前段階のものでも結構です。ただ、全体の統一性があり、特に序論や結論において研究全体の意義と成果が明確に整理されていること、研究が全体として高い独創性を持ち、学界に貢献する点が認められること、などが要求されます。したがって、大変僭越ではありますが、学位請求論文を出される場合には、論文の構成などについて、教室の誰かにご相談いただいた方が、ことがスムースに進むように思えます。

**＜研究室の動静＞**

教室の事務は引き続き真木智子さんに御願い致しております。

本年度は，大学院博士後期課程７名，修士課程８名，学部４回生９名，３回生６名，大学院聴講生１名，となっております。

**〈３回生〉**

本年度は６名の３回生を迎えました。簡単に自己紹介して頂きます。

氏家真紀子

出身は大阪府豊中市です。現在は体育会馬術部に属しており、生活リズムは学生というより厩務員です。馬に接するように、地理学にも愛情を注いで早くうち解けたいと思っています。どうぞ宜しくお願いします。

福本　拓

僕はどちらかと言うと外に出るのが好

きなので、現実にある地理的事象や人々や文化そのものに触れ、それを研究に生かしたいと思っています。研究したい具体的な内容は決まっていませんが、自分が満足できる結果を出せるように一所懸命頑張りたいと思います。

北川哲也

石川ゼミに決まりました、北川です。よろしくお願いします。京都府城陽市にある自宅から通っています。サークルは鉄道研究会。また、バスケを愛好していますので、それらの方向で話をできる方を探しています。

井上悠輔

大阪の箕面から来ました。所属は石川先生のゼミで、GIS 等の地理情報科学に興味をもっています。部活は陸上で中距離をしているので、燃え尽きてしまわないか心配ですが何とか（うまいこと？）切りぬけるつもりです。よろしくお願いします。

郡田　篤

こおりだと読みます。滋賀県生まれの東京育ち。関西弁喋れません。関西の地名には、直接的に、しかも深く、その土地の歴史や文化を感じさせるものが多いですね。正直に言うと、それが僕が京都に来た最大の理由かも知れません。どうぞよろしくお願いします。

松井　威

初めまして。今年から地理学専修に分属になりました松井威といいます。僕の出身は奈良県の高取町というところで結構な田舎です。特にこれといって何もないですが一度来てください。地理学教室についてまだよくわからないことも多いのでよろしくお願いします。

**〈学部卒業生・院生の進路〉**

＊学部卒業生

岩崎しのぶ　大学院文学研究科
上杉和央　大学院文学研究科
北野剛寛　日本放送協会（ＮＨＫ）
谷　明人　東京大学大学院新領域創成科学研究科
南部一寿　北國銀行
前田奈実　奈良女子大学生活環境学部

＊科目等履修生

足利亮太郎　甲陽学院高等学校講師

＊聴講生

叶谷房子　インフォマティクス

＊博士後期課程

滝波章弘　高知大学人文学部助教授
米家泰作　愛知県立大学文学部講師
堀健彦　新潟大学人文学部講師

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は，閲読を経た論文のリストです。

D3. ロサリア・アビラ・タピエス

○ "Nueva perspectiva de las migraciones españolas", *Anales de Geografía de la Univ. Complutense* (Madrid)13, 111-126 (1993)

○在日外国人と日本人の人口移動パターンの比較研究——大阪市生野区を事例として——. 人文地理 47-2, 62-76 (1995)

○"Migraciones interiores en Japón", *Estudios Geográficos* (Madrid)227, 297-311 (1997)

○"La emigración histórica japonesa a Manchuria: estado de la cuestión y documentación", *Estudios Geográficos* (Madrid)233, 739-753 (1998)

D3. 李　禧淑

○韓国における氏族マウル住民の移住と適応——ダム建設にともなう移住民・全州柳氏を事例として——. 人文地理 49-3, 1-21 (1997)

D3. 門井直哉

○長門国府周辺施設の歴史地理学的考察. 史林 79-2, 135-150 (1996)

○評領域の成立基盤と編成過程. 人文地理 50-1, 1-22 (1998)

D3. 祖田亮次

○輪島市海士町の漁民集団——その特質と持続性の背景——. 人文地理 48-2, 62-75 (1996)

○サラワク・イバン人社会における都市への移動とロングハウス・コミュニティの空洞化. 地理学評論 72A-1, 1-22 (1999)

○サラワク・イバン人社会における私的土地所有観念の形成. 人文地理 (印刷中)

D2. 有留順子

○性差からみた大都市圏における通勤パターン ——大阪大都市圏を事例として——. 人文地理 49-1, 47-63 (1997) [小方　登と共著]

D2. 今里悟之

○村落の宗教景観要素と社会構造——滋賀県朽木村麻生を事例として——. 人文地理 47-5, 42-64 (1995)

○村落空間の社会記号論的解釈とその有効性——玄界灘馬渡島を事例として——. 地理学評論 72A-5, 310-334 (1999)

D2. 山村亜希

○中世鎌倉の都市空間構造. 史林 80-2, 42-82 (1997)

○守護城下山口の形態と構造. 史林 82-3, 1-43 (1999)

M2．中鉢奈津子（カナダ，クイーンズ大学Ｍ２）

○京都市における高齢者の外出行動．人文地理 50-２，68-83（1998）

M2．泉谷洋平

○棄権率からみた国政選挙と地方選挙の関係 ――コンテクスチュアルな視点からの因果分析――．人文地理 50-5，83-97（1998）

M2．河野良平

○通信販売の流通システムと空間的特性 ――大手業者ニッセンの事例をもとに――．人文地理 50-6，44-60（1998）

**〈1999 年度講義題目〉**

＊講義（系共通科目）＊

教授　石原　潤　地理学講義

＊特殊講義＊

教授 金田章裕　景観史の諸問題

教授　石川義孝　人口地理学の諸問題

人環教授 足利健亮　歴史地理学の諸問題

〃　金坂清則 地理学における人物研究の意義と課題

総人教授　山田　誠　比較地域形成論

理学研教授　岡田篤正　自然地理学

講師　伊東　理　小売商業の地理学研究

講師　小長谷一之　都市・経済地理と GIS

講師　杉浦芳夫　地理空間の分析と解読

＊演習Ｉ＊

教授　石原　潤　地理学研究法Ｉ

〃　金田章裕　〃　II

〃　石川義孝　〃　III

＊演習II＊

教授　石原　潤　人文地理学の諸問題

〃　金田章裕　〃

〃　石川義孝　〃

＊講読＊

教授　石原　潤　英語地理書講読

〃　金田章裕　独語　〃

講師　片平博文　仏語　〃

人文研助手　高嶋　航　中国　〃　講読

＊地理学実習＊

教授　石川義孝

講師　森　三紀

博物館助手　佐藤廉也

＊大学院演習＊

教授　石原　潤　地域の諸問題

〃　金田章裕　〃

〃　石川義孝　〃

# 事務局から

**＜地理学談話会 1998 年度会計報告＞**

（1998 年 4 月 1 日～1999 年 3 月 31 日）

【資金会計】

〈収入〉

| | |
|---|---|
| 年会費 | 218,980 |
| 繰越金 | 349,929 |
| 計 | ￥ 568,909 |

〈支出〉

| | |
|---|---|
| 運営費への振替 | 190,046 |
| 次年度への繰越 | 378,863 |
| 計 | ￥ 568,909 |

【運営費会計】

〈収入〉

| | |
|---|---|
| 資金会計からの振替 | 190,046 |
| 秋期懇親会会費 | 175,500 |
| 春期 〃 | 127,500 |
| 計 | ￥ 493,046 |

〈支出〉

| | |
|---|---|
| 秋期懇親会経費 | 153,214 |
| 論文発表会経費 | 137,602 |
| 会報等印刷費 | 89,020 |
| 通信・文具費等 | 100,491 |
| 弔電 | 12,719 |
| 計 | ￥ 493, 046 |

**＜受贈＞**

村上次男先生（昭和 11 年卒）より，教室に下記の古地図類の御寄贈をいただきました。

《復刻版古地図類》

(1)元禄日本全図

(2)鳥瞰図様日本全図

(3)蓬莱図（東海道五十三次）

(4)浪華友鳴松旭図

(5)文政御江戸絵図中判

(6)文政江戸図

(7)地球訳図（東西半球図）

(8)大日本海陸全図

(9)大日本沿海略図

(10)明治改正大日本輿地全図

(11)第一軍管地方二万分之一迅速図一覧表

(12)大日本全図（陸軍参謀局）

《アトラス》

(1)ATLAS ZUR GESCHICHTE. 1-2. VEB Hermann Haack.(1973:1975)

(2)R.A.Skelton,F.S.A.'DECORATIVE PRINTED MAPS OF THE 15th TO 18th CENTURIES.' Spring Books.(1967)

(3)M.Merian 'Die Schönsten europäischen Städte.' Hoffmann und Campe Verlag.(1963)

(4)ATLAS ZUR BODENKUNDE. Bibliographisches Institut Mannheim. (1965)

(5)ATLAS ZUR GEOLOGIE. Bibliographisches Institut Mannheim. (1968)

(6)ATLAS ZUR BIOGEOGRAPHIE. Bibliographisches Institut Mannheim. (1976)

(7)ATLAS ZUR PHYSISCHEN

GEOGRAPHIE. Bibliographisches Institut Mannheim.(1971)

(8)ATLAS ZUR OZEANOGRAPHIE. Bibliographisches Institut Mannheim. (1967)

(9)ATLAS ZUR HIMMELSKUNDE. Bibliographisches Institut Mannheim. (1969)

《日本地誌教科書》

(1)師範学校編集日本地誌略、巻 3･4、文部省（明治十二年）

(2)小学新撰地誌、巻２，教育書房（明治十七年）

地図類・教科書類は地理学教室所蔵の古地図コレクションと共に，新設の京都大学総合博物館に保管し，今後の研究・教育に供したいと存じます。

**＜訃報＞**

前回の会報発行以降，次の方々が亡くなられました。謹んでご冥福をお祈りい申し上げます。（確認分，括弧内の数字は卒業年，敬称略）

須藤　賢（S11）
宮川　義閑（S24）
服部　昌之（S30）
禾　佳典（H９）

**＜お知らせ＞**

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は談話会事務局までご一報下さい。

（数字は卒業年，敬称略）

都子　皇　（S15）
林　宏　（S16）
今井　平八（S19）
楓　雅之　（S20）
田島　渡　（S23）
川副　昭人（S29）
野田　茂生（S36）
林　洋子（S40）
岡本　靖一（S42）
石角　強　（S45）
山田　憲子（S45）
福田　新一（S46）
池内麟太郎（S48）
西沢　仁晴（S49）
生田　博文（S51）
長谷川正雄（S52）
遠藤　正雄（S53）
山口　一郎（S55）
貴志　謙介（S56）
山下　和久（S57）
松本　弘史（S58）
加藤　典嗣（S63）
那須　久代（S63）
山下　良（H元）
新谷　泰久（H2）
塚本　誠（H2）
岩部　敏夫（H3）
小口　稔　（H3）
坂部　誠治（H3）
石村　裕輔（H4）
渋谷　良治（H4）

糸原　健　（H5）
御手洗央治（H5）
六嶋　美也子（H5）
川添　利明（H7）
石原　大輔（H9）
金崎　享子（H9）
中川　訓範（H9）

**＜1999 年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ＞**

本年は下記のように実施する予定ですので，あらかじめご予定下さるようお願いいたします。

記

日時：　10 月 30 日（土）
場所：　京都大学文学部
講演予定者：
Joseph M. Powell（Professor, Monash University）
田中和子（福井大学助教授）
堀　健彦（新潟大学講師）

☆本年度の談話会費（1000 円）を，未納の方は，同封の振込用紙にてお払い下さいますよう，よろしくお願いいたします。

【編集後記】

談話会報の発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。御寄稿，御講演いただきました先生方，ありがとうございました。

編集　有留順子
今里悟之
山村亜希
真木智子

京大時計台裏在住のネコ